

埃ほこりの降ふる日ひ

雪のようにふわりふわりと舞い降りてくる埃ほこりは、
学校中のあらゆるものに積もってゆく。

教室の中の、机いすや椅子いす。廊下ろうか、靴箱くつぽこ、ロッカー、
消火器。

もとから埃をかぶっていたもの。掃除そうじが行き届
き輝いていたもの。そのどちらへも埃は区別なく
降りつづき、境界線が消えてゆく。

校舎、校庭、体育館、部室。

屋内、屋外の境もなく、ゆったり埃は降りつづ
ける。

そんな埃の降る日。

わたしは屋上への階段に座って、ぼんやりと宙
を眺ながめている。

埃は窓からこぼれる日差しを浴びて、光まみれ
になっている。

スカートに落ちた埃に目を落とし、わたし自身
も降りゆくそれに埋うもれてゆくのを自覚する。

学校中の埃が吐きだされる、この日。

箒ほうきや叩たたきを使わずとも、学校自身が自浄作用を働かせるように、溜たまった埃が四方からふっふつと飛びだしてくる。それは空中で混ざり合い、重力を得て落ちてゆく。目に映るすべての色が褪せている。その光景を眺めていると、幾世いくよもの時を経て、やがて忘れられた古代遺跡いせきでも見ているかのような懐古かいこ的な気分になる。

時おり強い風が吹くと、廊下に積もった埃が舞いあがり、ホワイトアウトさながらになることもある。だからこの日ばかりは学校も休みになるのだけれど、来たがる生徒が続出するので仕方なく学校は開かれる。

生徒たちは、マスクとゴーグルを身につけて登校する。かくいうわたしもその一人で、この日をずっと待ちわびていた。

他校の生徒に言わせれば、灰色の汚れに向かつて登校していくE高生たちの姿を見ると、じつに滑稽こっけいな気持ちになるらしい。が、それは何も分かっている人の言葉だと言い切れる。

そもそも埃は、汚れなどではないのだから。

それは陽の要素を引きだすための、陰いんの要素。学校生活を営む上で、なくてはならないものなのだ。

けれど、E高生は反論しない。心の中で、ひっそり思っていればいいだけの話だ。

ふと、わたしは耳を澄すましてみよう。どこからか男子たちの騒さわぐ声が聞こえてきて、本当に子供みたいだなあと呆あきれてしまう。

男子たちは教室に入るや否いなや、我先にと外に出ていってはいしゃぎはじめ。地面に積もった埃を手で握り、ボールをたくさん拵こしらえる。そして、それを投げてぶつけあい、雪合戦まねごとの真似事をする。埃のボールは風船でドッジボールをするように、空気に負けてふにやりと曲がる。それがおもしろいのだと、彼も言っていたなと思いだす。

埃は徐々に、人の気配を消してゆく。

足跡は、歩いたそばから失われる。話している相手の声も、埃はほに阻まれ遠くなる。

ときどき、ゴーグルを手で拭ふきながら、ぼんや

りと思う。

去年のこの日は幸せだったなあ、なんて。

屋上への階段は、カップルの温床になっている。昼休み、放課後。ちよつとした時間を見つけては男女たちが集まってきて、肩を寄せあい密談を交わす。

わたしもこの階段で、彼と二人でお弁当を食べたものだった。彼の部活が休みのときは、放課後になると下校時間が来るまでのあいだ、他愛もない話を延々としていた。

内容なんて覚えてない。ただ楽しかったなあという感情だけが残っている。具体的な思い出よりも、案外そういうもののほうが後々胸に刺さったりするのだと、いまになって思わされる。輪郭りんかくのぼやけたものほど、忘れ切るのが難しい。

わたしは後ろを振り返る。それから階下に目を落とす。

何組かのカップルたちが、あいだを空けて座っている。

誰もが自分たちの世界に入りこみ、端はなから周囲

のことなど気にしていない。けれど、間もなく世界は本当に二人だけのものになる。降りゆく埃は周囲の気配を消していき、誰にも邪魔されることのない、二人だけの空間をつくりだす。

そして、やがては相手の気配さえも消えてゆく。ただひとつ最後まで残されるのは、つないだ手の温もりだ。二人はそれを頼りにお互いの存在をたしかめあう。放せば途端に消えてしまう儂い温もりの中に、永遠の幸せを見出すのだ。

埃は弱まることなく降りつづける。

去年は自分も、彼と二人で宙に舞う光の粒を眺めていたなあと他人事のように思う。先のことなんて、まったく考えることもなく。自分たちのこの手だけは、ずっと離れることなどないのだと思いきいで。

付き合うことになってから、彼との距離は、あつと言う間に縮んでいった。それまで一度も人生が交わったことはなかったのに、昔から知っている幼馴染みみたいに溶けあっていた。

でも、だからこそ、ぶつかるようになるまでも

早かった。

ちよつとした嫉妬しつとがきっかけだったり、言葉の綾あやがきっかけだったり。

もういいと、言つては謝りあやま、言われては謝られ、一回一回がひどくなつて、回数も少しずつ多くなつて。

いまなら、分かる。あのときのわたしたちは、噛かみあつていない歯車を、力まかせに噛みあわせようとしていただけだったんだあつて。小さなズレはちよつとずつ大きくなつていつて、ぎすぎすしたまま回すうちに、部品はぽきんと折れてしまった。

それでも最初のうちは、見て見ぬふりをしつづけた。だけど気づくと、部品全部が壊こわれていて。元に戻そうとがんばつてみても、間に合わせの接着剤じゃあ、継つぎはぎだらけで。

先に別れを切りだしたのは彼だった。

そのころになると、薄々お互い分かっていた。もう長くはつづかないということ。

でも、言われたときは、やっぱりひどく落ちこ

んだ。

振られてから、わたしは自暴自棄じぼうじきになった。勉強も全然手につかないし、友達と遊ぶ気にもならないし。甘いものを食べてごまかして、ずいぶん太って。無理にダイエットして親に心配されたりしながら、結局リバウンドで余計に太って。成績が落ちたのも自分のせい。友達との距離が遠くなったのも自分のせい。

何やってんだろかなあと、頭では嫌いやというほど分かっていた。

分かってはいたけれど、感情は置いてけぼりだった。空虚な心を抱かかえたまま、わたしは彼との思い出を無理やり心の奥底に仕舞いこんで、開かずの扉とびらにしてしまった。

埃の降る日。この日を、どれだけ待ち望んだか分からない。

今日、埃を出すのは学校だけじゃない。

生徒たちが、自分の中の埃を出す日でもある。

内に積もった負の感情を、きれいにするため。

いつの間にか埋もれてしまった思い出を、もう一

度よみがえらせるため。

埃というものは時間の流れを止めて、あらゆるものをセピア色の世界に押しやる力を持っている。けれど同時に熟成させて、拭ぬぐったときに新たな息い吹ふきを与えてくれうるものでもある。積もり拭ぬぐわれるその過程を経たうえで、また新しい時間が流れるのだ。

だから人は、埃に惹ひきつけられる。単なる汚れで片づけてしまえない何かを感じる。

すりガラスの窓を開けたときに散る埃の粒を、いつまでも眺めていたい気持ち。

光芒こうぼうの中で煌きらめく埃の結晶を、フィルムに焼きつけたくなる衝動。

本来なら、この時の洗練は年月をかけてじっくり行われるものだ。

でも、こうして降りつづく埃は、たった一日で同じことをしてみせる。

わたしは思う。

いまごろ、男子たちは校庭に埃のダルマをつくって喜んでるんだろうなあ。はしゃぐ輪の中には、

彼の姿があるかもしれない。自分とは無縁になつた人。いつか、ほかの誰かと結ばれるであろう人。

わたしはカーディガンの袖で、くすんだゴーグルを拭う。

降り注ぐ日差しは、いつしか赤みを帯びはじめている。もうすぐ下校の時間だ。

先生が急かしくる前に、帰り支度をはじめな

いと。

わたしは立ちあがろうとする。

そのときだった。

不意に、身体から何かが抜け落ちていくような感覚に襲われた。

でも、わたしは気にせず立ちあがる。

いや、立ちあがったはずだった。

それなのに、相変わらず自分は座ったままでいる。屋上へとつづく階段に。さつきまでと同じように。

そしていま、わたしは目の前に立つ自分自身の後姿を見つめるといふ不思議な光景に直面してい

る。

一拍置いっぱくいて、なるほど、と思う。

視線を落とせば、わたしの全身は、すっかり灰色あざになっなっている。

そうか、わたしは吐きだされるほうの役目を担になうことになったのか。

そうひとりなっとくで納得すると、また前に目を向ける。埃を出し切ったきれいなわたしが、くると顔をこちらに向けて手を振ってくる。

今日という日は、脱皮する日なのだという人がある。過去を吐いて、また次の未来へと進む、その境になる日なのだ。

そうなればいいなと思いつながら、わたしは去ってゆくわたしを見守っている。そして明日の自分の幸せを願う。

あなたが過去に縛られるのは、今日で終わり。あとは全部、わたしが引き受けたから。

踊り場を回って、わたしの姿は見えなくなる。

階段に残されたわたしは、明日になれば片づけられる単なる埃かたまりの塊だ。

けれど汚れなどでは決してない、と信じている。陰と陽の、あくまで片方。学校生活を営む中で、なくてはならない存在。

明日になると、学校のあちらこちらに誰のものとも知れない人の形をした埃たちが転がるだろう。それを袋に詰めて焼却するのが、埃の降る日の翌日の、E高の恒例行事なのだ。

わたしみたいに大きく太った塊なんて、掃除するのが大変だろうなあと思う。それを考えると掃除係の人が気の毒だ。

でも、いまの自分はあるより深く考えすぎず、ただ明日を待てばいいだけなのだろうなあ、とも思う。沈みゆく陽を浴びて煌めいたり、月の光に照らされてひっそりと輝いたりする埃たちを、心ゆくまで眺めるのが役割なのではないだろうか。それに、まあ、考えてみるとわたしを運ぶのなんて、そんなに大変じゃなさそうだし。

そう思うと、少し気がラクになる。

だって、いくら大きな塊といったところで、埃は埃、なのだから。